

# 令和元年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

## 1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

## 2 本年度の重点目標

(1) 園運営 (2) 教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、職員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。</li> <li>・記録をもとに遊びについて話し合い、研究テーマ「遊びが充実する保育を目指して一遊びって大切!?’」（一年次）のもと研究を進める。</li> </ul>
(3) 地域への貢献 (4) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。</li> <li>・保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。</li> <li>・地域に向けて積極的に情報発信を行うとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKi」との連携を図る。</li> <li>・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。</li> </ul>

## 3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

## 4 分野・領域ごとの学校関係者評価

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園運営	○組織運営 ・職員一人一人の主体的な取組を促すよう、園長がリーダーシップを發揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園長のリーダーシップのもと園運営を行うとともに、園務が着実に遂行されているかを会議等の場において点検した。</li> <li>・全職員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、会議やその他の場面で機会を捉えながら管理職が指導助言を行った。</li> <li>・働き方改革を進めていくために、昨年度に引き続き、会議等を通して職員の意識化をさらに促すとともに、教育の質を確保しながら職務内容や行事の見直しを行った。</li> <li>・今年度は、大学の施設整備計画に基づき、老朽化に対応するための園舎改修を行い、園の環境を整備した。</li> </ul>	A		<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p> <p>[園運営] ・自己評価及び改善の方策は適切である。</p> <p>○組織運営 ・着実に働き方改革を進めている点は評価できる。教師がすべき仕事には園児たちのためにしっかり時間をとってほしいし、それが働き方改革にもつながる。</p> <p>○学年、学級経営 ・教育課程に基づき計画的に保育を進めるとともに必要に応じて修正している点は特に評価できる。</p> <p>○説明責任 ・保護者に対し積極的に園の方針等について説明し、理解を得ようとしている点は特に評価できる。</p> <p>○危機管理体制 ・山国地区という視点で附属学校全体を巻き込んだ取組へと改善を進めようとする姿勢は適切である。 ・新型コロナウイルスへの様々な対応をしていると思うが、沈静後にその対応を精査し、今後の危機管理体制の強化につなげていくことを期待する。</p>
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け課題を確認しながら、計画的に保育を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程に基づき、学年経営及び学級経営の方針を立てて計画的に保育を進めた。</li> <li>・学期ごとに会議等で振り返り、達成状況や課題を確認しながら、保育の質を高めるよう取り組んだ。</li> </ul>	A		
	○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容については、管理職や担任が機会を捉え、話したり文章にしたりして、伝えていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふよっこだより」を年23回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取組等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。</li> <li>・園の教育を理解してもらうため、全学年の保育参観及び保育参加日（「ふよっこデー」）を年10回実施し、保育を見る観点を事前に伝え、当日も機会を捉えて保護者に説明をし、理解を得るように努めた。</li> <li>・降園時には、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝えるようにしている。また、園長が儀式的行事の後に本園の教育方針について説明したり、副園長が年2回のクラス毎の学級懇談会に参加したり、機会を捉えて日常的に保護者と話したりすることで本園の運営について理解を得るようにした。</li> <li>・預かり保育利用者は、日々の保育説明を聞く機会が少ないため、迎えの時間を利用して直接話す機会を作ることに努めた。</li> </ul>	A		
	○危機管理体制 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の点検とその改善・拡充に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園内の施設、設備、備品等の安全点検を随時行うことに加え、PTA役員による安全点検を年2回行い、より細部にわたっての点検と改善を行った。</li> <li>・毎月1回「子供安全の日」を設け、学年に応じた安全指導を行うとともに、地震、火災等の避難訓練、保護者と連携しての引き渡し訓練を行った。</li> <li>・幼児の怪我や疾病等緊急時に職員が適切な対応ができるよう、初期対応の方法についての共通理解を徹底するとともに心肺蘇生法の研修を行った。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山国地区のすべての子供たちの安全確保のために、附属学校園の一体化した取組を進めていきたい。</li> </ul>	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育研究活動	○教育活動 ・研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通した教育の充実を図る。	・研究活動を通して遊びについての理解を深めるとともに、「うれしのタイム」における遊びを通した教育の充実を図るために、朝の打ち合わせ時には、その日の保育のねらい等を担任より示し、副担任や他学年の職員とも共通理解を図りながら保育を行った。 ・週の初めに、各学級の週案を副担任・養護教諭を含む全職員に周知し、全職員の共通理解を図りながら計画的な保育を行うよう意識して取り組んだ。 ・園行事等は、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取組の方向について共通理解するとともに、行事後には、保護者アンケートも参考に振り返りを行い、次年度につながるようにした。	A	
	○幼児理解 ・幼児一人一人のよさや特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーテンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。	・幼児一人一人の記録に基づき、環境の構成や援助を考えることを継続して行うとともに、定期的に職員で話し合いを行った。 ・キンダーガーテンカウンセラーに、各クラス学期に2～3回観察してもらい、指導方法のアドバイスを受けたり、保護者の相談へつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。キンダーガーテンカウンセラーからのアドバイスが記載された記録を必要に応じて閲覧したり、全職員参加の園内委員会（年3回）を開いたりし、情報が共有できるようにした。 ・加東市発達サポートセンターはびあによる加東市在住幼児に対する個別指導を受ける場をもった。 ・就学に向けて、希望進学先調査を行うとともに、担任や管理職が保護者からの進学相談に対応した。必要に応じて希望進学先と連携し、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。	A	
	○研究活動 ・研究テーマ「遊びが充実する保育を目指してー遊びって大切!?ー」（年次）のもと研究を進める。	・日々の遊びの記録をとり、定期的に職員で話し合い、遊びについて検討することを通して、研究テーマ「遊びが充実する保育を目指してー遊びって大切!?ー」のもと研究を進めた。	A	
	○子育て支援事業 ・保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。	・機会を捉えて幼児期の育ちについて伝えていくとともに、「ふよっこデー」の実施や「きっすくらぶ」による保護者の保育参加など、保護者の子育て力向上を支援する取組を行った。 ・子育て環境をよりよくするための取組である、附属小学校の参観及び懇談日の一時預かり保育を実施した。 ・対象・時間等を拡充した預かり保育を実施し、就労等家庭の子育て環境の支援を行った。	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>[教育研究活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価は適切である。</li> </ul> <p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>幼児の記録を共有し、担任だけでなく多くの目で見守っていることは特に評価できる。</li> </ul> <p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>キンダーガーテンカウンセラーとの連携のもと取り組んでいる点は特に評価できる。もっと回数が増えてもよいのでは。</li> <li>特別支援の幼児のために職員が確保されることを願っている。</li> </ul> <p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>預かり保育が月ごとに充実していていることや附属小学校の参観日の一時預かりといった独自の取組をしていることは、特に評価できる。</li> <li>預かり保育はもっとアピールしてもよいのではないか。ただ、預かり保育の園児数が増えているので、場所や職員の確保が急務だと考える。預かり保育職員の増員が必要ではないか。</li> </ul>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
地域への貢献	○開かれた幼稚園づくり ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間通して実施するとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKI」とも連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。	・未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年10回実施した（年間の登録者数は97組）。活動時間は約2時間で、活動の前半は「うれしのタイム」で在園児と共に遊び、後半は遊戯室において、クラス単位で在園児や保護者有志と共にする活動、園長、副園長による子育てワンポイント講座、触れ合い遊び、大学院生による遊びなど内容を工夫した。 ・子育て支援ルーム「かとうGENKI」とは、園児が訪問し「子育てひろば」の案内をしたり、未就園児親子の参加可能な活動の案内をしたりするなど一層の連携を図っている。 ・今年度は、PTA作成の「おひさまほっぺ」にて、保護者から見た幼稚園の様子を掲載し、発信を行った。 ・運動会等の行事や米づくり等の活動においては、保護者や関係の方々に協力してもらい実施することで、より豊かな活動になるよう取り組んだ。	B	・ホームページの改良を含めて、地域や家庭に対するより効果的な情報発信の工夫をしたい。
	○研究発表や公開保育 ・研究発表会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。	・研究発表会を兵庫県教育委員会、加東市教育委員会の後援のもと開催し、午前中は公開保育、午後は、研究テーマ「遊びが充実する保育を目指して一遊びって大切!？」に基づく研究協議、玉川大学教育学部教授の岩田恵子氏を講師とした講演を行った。兵庫県内外の幼稚園、保育園、こども園の先生方を中心に137名の幼児教育関係者の参加があった。	A	
他校種（小・中・高校・大学）との連携	○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種と連携し互恵性のある交流活動を行う。	・附属小学校との交流では、5歳児が5年生と交流給食を実施したり（11月と2月）、3年生の授業を通じた交流を行ったりした（計画していた一部の活動は、新型コロナウイルス対応で未実施）。 ・附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参したり、一緒に遊んだりした（7月と9月）。 ・附属三校園の交流として、昨年度に引き続き、5歳児・小学5年生・中学2年生が参加する三附属連携お茶会を行った（2月）。 ・県立社高等学校との交流では、1年生が「触れ合い育児体験」として、園児と一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒が集団行動を見せたりした。 ・本園職員が県立社高等学校の授業に、職業紹介の講師として参加協力した。 ・附属三校園の連携を進める三附属連携推進協議会を年3回開催し、互いの教育研究活動の紹介や合同の研修を行った。	B	・幼小中のカリキュラムの接続と教育活動の連携をより一層図っていくように努めたい。
	○実地教育（教育実習） ・大学教育とつながりをもった効果的な初等基礎実習を実施する。	・各クラスで行う反省会に大学教員が参加し、大学の授業（リフレクション）と連携をもたせ、より効果的な指導を行った。 ・実習生には、実習後も本園の研究発表会への参加（大学の授業「教職実践演習」の一環）並びに運動会、生活発表会等の園行事への参観を呼びかけ、大学教育との連携を図った。	A	
	○大学との連携 ・大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取組を行う。	・幼年教育・発達支援コースの大学教員には、本園教育の質の向上と研究推進のために、研究発表会に参加してもらい、助言を得た。 ・3・4歳児の親子活動（各年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は年齢に応じた造形や運動の内容で実施し、活動後に大学教員による保護者向けの講話も行った。4歳児の陶芸活動は大学キャンパスで行い、大学構内散策や食堂で昼食をとる機会も設けた。5歳児の陶芸活動は、今年度は、大学教員に加え、伝統工芸士や兵庫県陶芸美術館スタッフの指導のもと実施した。	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>[地域への貢献]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価及び改善の方策は適切である。</li> </ul> <p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ホームページの改良を改善の方策として位置付けている点は適切である。どのように改善を進めていくかが明確にされるとなおよい。</li> <li>地域や家庭に向けての情報発信をより一層進めていってほしい。</li> </ul> <p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の教育現場に発信していくことは大切な地域への貢献であると考えられる。</li> <li>専門家を含む多くの目で評価されるよう努力している点は特に評価できる。</li> </ul>
<p>[他校種との連携]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価及び改善の方策は適切である。</li> </ul> <p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>校種間連携を一過性の取組として終わらせるのではなく、カリキュラムの観点から長期的展望を持ちながら改善を意識している点は適切である。</li> <li>他校種との交流がイベントにならないように、メリットを掘り下げて考えてほしい。</li> </ul> <p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>附属学校としての利点を生かしながら大学以外との連携も進めたことは特に評価できる</li> <li>大学教員の協力を得られるよい環境であるので、次年度以降も継続してほしい。</li> </ul>